# O-CUP　２００２

**東京 OL クラブが、創立３０周年の節目の年、４年ぶりにホームテレインである八ヶ岳の麓、富士見高原で２日間大会を開催した。４００人を割る参加者、コントロールの不十分さを感じさせるコース、計算センターでのトラブル。老舗クラブの看板イベントだけに、参加者の目も厳しい。**

**ＯＬ人口の減少、公認大会離れなど、様々なＯＬ界の問題が指摘される今、参加者に満足を与える大会はどうあるべきなのか、Ｏ－ｃｕｐをレポートしながら考えてみたい。**

## 加賀屋渋くＭＥ優勝、塩田二日目を手堅く押さえてＷＥを制する

男子エリートでは、一線を退いた後ますます好調の加賀屋が、初日トップの松澤を押さえて、４位から順位を上げての優勝であった。

初日に４位ながらトップと２分３０秒差につけた加賀屋は、十分チャンスはあると考え二日目のレースに臨んだ。

30 秒前の許田を１番でとらえ、2 番で先行。6－７番で、先行する山口と高橋を捕らえた。

12 番ではそれぞれ完全に互いの姿が見えなくなったものの、かなり地図が怪しい 13 番では、慎重にアタックしたつもりでもコントロールを見つける間にかなり時間を要し、勝負はほぼリセット状態に入る。

その後ほぼ直進した高橋に対して、やや右目に多少迂回ながら植生の良いルートを選択した加賀屋が高橋を振り切って優勝。

ゴールして初めて自分の勝ちを知ったというきわどい優勝であった。

またＷ２１Ｅの塩田は、初日圧倒的な強さを発揮した。２日目は後続の選手がひっかかった特徴のない斜面でのコントロールも無難こなし、これまでにスピードに加えて、レース勘もさらにブラッシュアップさせていることを証明した。

二日目には、安全なルートで手堅く守りに入るという若手らしからぬレース展開も披露し、春の京葉以来の優勝を手にした。なお、塩田はその後筑波、東と３連覇である。

加賀屋は、地図・コースについて次のようにコメントしている。

「地図とコースについてはやはり不満です。テレインと天気は素晴らしかったけれど。

地図はコンタが足りなく、現地にはいろいろと地形があるのに単純化されすぎて、イメージがわきずらかった。それはまだ良いとして、点状特徴物（特に大きな岩）がとってなかったり、相対的な位置関係がかなりずれていたりしたのはかなり競技に影響しました。

コースも似たようなミドルレッグばかりで、ルートプランニングの要素がすくなく、めりはりに欠けていました。」

一見した地図、コースの印象は特段に悪いものではない。名門東京ＯＬＣの看板大会への期待故に、辛い評価を受けているという側面があるかもしれない。

## 痛い速報のトラブル

電子カードを使いながらの速報のトラブルも痛い。電子カードには、計時とコントロール通過証明という二つの機能があり、多くの一般大会では、両方の機能をあわせて利用している。ただこのためにはリフトアップスタート（スタートと同時に電子カードをスタートユニットから離す）や、ゴールでのパンチングフィニッシュ（自分でユニットにパンチすることでゴール時刻を計時する）が必要である。

こうした利用方法が十分に徹底されていなかったことが、電子

カードを使いながら、速報が十分に出せない一つの原因のようだ。２日間大会だけに、チェイシングのスタート時刻が当日朝まで出せなかったのは痛い。

参加者も、老舗の看板大会としては、さびしい３００人台に留まっている。大会コンセプトとして、人数を抑えるというのがあったのかもしれない。もしそうだとしても、その決定自体、往時の大会に関わったものとして、さびしい気がする。

大会参加者が多いことによる賑やかさも、参加者の楽しみの一つである。それを犠牲することで、どんな大会の魅力を加えることができるのか。その視点はあっただろうか。

現在、東日本や西日本といった公認大会をはじめ、関東近郊の大会ですら軒並み参加者数が減少している。オリエンテーリング人口の大きな割合を占める学生が独自の大会を持ち、参加費の高い公認大会を敬遠しているのも、一つの理由だ。またそもそもオリエンテーリング人口自体減少の道をたどっている。今回のＯ－ｃｕｐは、オリエンテーリング界の衰退振りを象徴的に体現しているようにすら思える。

それは東京ＯＬだけの問題に限らない。ボランティアベースのオリエンテーリング大会運営で、どこまで参加者へのサービス、新規取り込みができるか。難しいが、取り組まなければならない課題であろう。

この参加記は小学３年生の孫と爺爺の会話を、今後、大会開催を予定している競技責任者とコントローラーの眼に止まることを願いながら「幸と爺爺のOL問答」番外編として書いたものである。　（武石　雄市）

**第１日目　10月13日(日)**

昨夜遅く、小淵沢の八ヶ岳ポニーユースホステルに泊まり、朝、ホステルのおばさん（ペアレント）に激励され、会場に到着。

会場は、駐車場らしき１画。雨天ならテントの無い者がレストハウスに駆け込んで大混雑が予想される。

ゆき「じいじい、ゼッケンが入った袋にぼくの名前があったから持ってきたよ」

爺爺「ゆき、早いね。爺爺も取ってくるか。あっ！ゆき、大変だ。ゼッケン用の安全ピン持ってくるの忘れたー」

ゆき「安全ピンなら、ぼく持ってるよ。ママが入れてくれたんだ。爺爺の分もあるよ」

爺爺「今回の忘れ物第１号だな」

**―　最近、国内の大会もゼッケン用安全ピンを持参するようにプログラム記載が見受けられるが、資源保護のためマニュアル化に賛成　―**

ゆき「スタート準備完了」

爺爺「ゆき、ゼッケン付けてコンパス持っただけではスタートできません。Eカードにバックアップラベル貼り付けて、コントロール位置説明表も持ったほうが良いよ」

ゆき「わかった。じいじい、この位置説明表は漢字が多いね。１番のじんこうとくちょうぶつって？」

爺爺「いろいろあるよなー。何だろうね。幸達のコースは道を通るようになってると思うから、先ずは行って見る事だね」

**―　小学生クラスの位置説明は、抽象的な名称を避け、特徴物の具体的名称で説明する必要がある　―**

ゆき「じいじい、ぼく時計持ってくるの忘れた。忘れ物第２号だー」

爺爺「そんな事もあると思って爺爺は２個持ってきてたよ。貸して上げるから落とさないでくれよな」

ゆき「うん。ぼくのスタートは10時４５分だからもう行かなくちゃ」

爺爺「そうだね。スタートまで３kmで４５分も歩くらしい、爺爺は１時間後だから、ゆき一人でいけるか？」

ゆき「うん。じゃー、いくねー」

**―　子連れグループや小学低学年生には、スタート地区までの３km は長い。工夫が必要と思います　―**

**―　１時間後、スタート地区に到**

**着したら、一部クラスのスタートが繰り下がっているらしい。どんなアクシデントだったろう？　―**

**―　爺爺がゴールして会場に戻ったが、ゆきが帰った形跡が無い。ゴールに迎えに行く途中、小林岳人一家の車に収容され帰ってきた　―**

**―　この大会は、何処にも給水所のなかった事も気になった。スタート地区まで長い誘導距離があり、しかも道路が近く運搬も容易と思われるのに水が無い。テレインはなだらかにしても、どのコースもコース半ばからは登りの連続だ。ゴール近くに車が入る道があり、その気があれば運搬可能だ。一滴の水分補給も考慮されていない事が気になった。秋とはいえ、海抜１１００ｍの高度は身体生理的に水分の要求を感じた　―**

爺爺「ゆき、ご苦労さん。地図に通ったルート書いて、どこが難しかったか説明してください」

―　図１　参照　―

ゆき「スタートで地図を正置して、少し行ってこみちを見つけて進んだら 104のコントロールがあったよ。ぼくの前にスタートした人もそこにいて、それから又道を進んでいって、４叉路があるんだけど地図にその道が無いんだ。」

爺爺「ゆきの前にスタートした人は８分前の木村友佳君だよね。それでどうしたの？」

ゆき「ぼくは、２番はこの道を進めばよいと思って、行ったんだけど見つからないから、スタートの方に戻って行ったら大きな道路に出たんだ、だから、又戻ってきたらリイサちゃん達と合って、お父さんから小道が地図に無いって教えてもらったんだ。２番の方角を教えてもらったんだけど、爺爺、しょくせいかい（植生界）はどんなところなの？」

爺爺「ゆき、分からなくなって戻るのは良いけど、１番は取ったんだから、１番より先に戻るのは無駄だよ。植生界かー、植生界がどんなところかわからなくて戻ったんだね。植生界はね、木の種類が変わる境とか、畑や草むらと林の境の事なんだけど、明日の朝、ユースホステルの散歩のときに実際の勉強しようよ」

ゆき「うん。ぼく、植生界のところで爺爺が走っていくの見えたよ」

爺爺「え！、ゆきはあの付近に１時間も居たんだ。爺爺を見つけたら呼べばよかったのに」

**図１　第１日　Ｎコース図**

ゆき「だって、爺爺は走って直ぐ見えなくなっちゃったよ、それから、３番とか４番の小凹地はなんと読む？」

爺爺「しょうおうちと読むんだけど地面が穴のように周りより低くなってるところだよ」

ゆき「そうか、わかった」

**―　Ｎコースはグループのコースと同一のことが多いが、小学生クラスの位置説明はその単語の意味が判らないようだ。家族のグループや大人の初心者と分けて説明の必要を感ずる　―**

**―　他のクラスにも植生界のコ**

**太い実線は渡辺幸のルートントロールがあったが、このテレインでは時期的な関係か植生界をチェックポイントやアタックポイントにする事をためらわれた。事実コントロールとした事に疑問のところがあった　―**

爺爺「ゆき、５番も植生界だけど判ったんだね」

ゆき「うん。少し行き過ぎたけど、これかなと思って中に入ったらあったよ」

爺爺「位置説明では、方角が東の角なのにコース地図は南の角にコントロールの○があるね。良く判ったね。まさかコントロールが東にあったんじゃないだろうね」

ゆき「わかんないけど、ここは簡単だったよ」

**―　線上特徴物の方角は、特にその距離が短く、方角に錯誤を与えるような近接の場合、初心者の位置説明にしても、正確に表現しなければ、コントロール設置の際、ミスの原因となり不成立になる可能性ある。このコースの⑤の場合、地図上のコントロールと位置説明に相違が見られるがどちらが正解？　―**

爺爺「５番から６番の岩には良く行ったね。どうやったの？」

ゆき「地図にコンパスを当てて６番の方向に矢印を合わせて、後はコンパス直進したよ」

爺爺「コンパス直進？　そんな言葉、師匠の爺爺は未だ教えてないと思うけど、知ってたの？」

ゆき「ううううん、ユースホステルで知念毅お兄ちゃん（横浜OL クラブ）と志村聡子お姉ちゃんが地図を見て話してたから、聞いたらぼくもやってる事だったよ」

爺爺「岩がごろごろしてるんだけど、コントロールがある東の岩はわかったの？」

ゆき「コンパス直進したら、最初は崖に行ったので、違うと思って５番に戻ってからもう一度コンパス直進したら、上の岩が見つかって、そこに無くてさ、下の岩に行ったら陰にあったよ」

爺爺「じゃ、６番から７番にもコンパス直進したんだ？」

ゆき「うん、小道が無いところだったけど人が通った後を進んでいったら道に出たんだ。７番から８番はボコボコしたところを行ったら穴のところにあったよ」

**写真　走るのも楽しいよ**

爺爺「ゆき、爺爺たちもそこを通るんだ。ボコボコのところはどるい（土塁）だよ。８番のコントロールは全員通るんだ。穴より少し広かっただろ、あれが小凹地だよ。そして、ゴールからリイサちゃんのお母さんの車にいっしょに乗せてもらったって訳か」

**―　（後日談）車から降りた時、ゆきは疲れて注意が緩慢になり E カードを落としたことに気が付かなかった。皆が帰った後気が付いた二人は、あちこち遅くまで探して、やっと見つけた。　そういえば町井瑞希君も落としたってお母さんと探してたな　―**

ゆき「爺爺、ぼく、２時間３０分くらいかかったから、腹減ったようー」

爺爺「そうだね、もう２時だもん

ね。レストハウスでおそば食べて、鹿の湯温泉の露天風呂に入るか」

ゆき「うん、ぼくのクラスの木村君とか、皆、早かったんだね」

爺爺「うん、速報は出ないけど木村君は割と早く帰ってきたよ。それにしても、速報はどうしたんだろう？、明日のスタートはチェイシングだから、ゆきはゆっくりでいいが爺爺たちのトップタイムは何分くらいなんだろう？兎に角明日は９時ごろまでくるか！なんだかペナの人が居るうわさもあるし心配だ。

**第２日　１０月１４日（祝）**

朝の散歩で、約束した植生界や浅い沢・小凹地を実地で確認した。

ゆき「爺爺、ぼくが借りた時計の電池が無いよ」

爺爺「ありゃ！ゆきのスタートはとっても遅いし、時計がないと困るよね」

ゆき「うん」

爺爺「電池換えようと思ってたが、忘れてしまって、忘れ物第３号だ。しょうがない、爺爺のを貸してやるか」

ゆき「爺爺、ぼく達の位置説明表が空っぽで無かったよ」

爺爺「困ったな。どれどれ、爺爺が探して来よう。ゆき！あったよ、誰か余計に持っていって袋に返してくれたらしい」

ゆき「良かった！。爺爺、今日のコントロールも岩がいっぱいあるね」

爺爺「またコンパス直進があるのかな？ゆき！現在地がわかるところを進んでね。今日は爺爺のスタートが早いからゴールしたら迎えに行くからね」

ゆき「わかった、爺爺がんばってね」

**―　幸のゴール後、コース図を見て驚いた。―　図２　参照　―**

**―　１番からいきなり A クラスのコントロールと同じなのだ。ラストコントロールとか誘導コントロールならともかく A クラスと N クラスのコントロールを混用した事は、どんな理由があるのだろう。**

幸のルートを聞けば案の定、不明瞭な小径の確認ができないのでスタート近くまで戻り、水系の線上を下って小道に出ようとしたらしい。

子供にしては最後の手段として選択したらしいが、それさえも難しく迷っているところを、運良く顔見知りの当日参加最終ランナーに助けられてラス前コントロール近くまで誘導してもらったことで事なきを得た。

S―①はＮクラスには難解すぎる。

セッターが少し工夫すると、富士見の森でも小学低学年対象にオリエンテーリングに親しめるコースは十分取れる。

道のつなぎが切れたら、誘導テープの敷設でも子供達は十分にオリエンテーリング気分に浸ることは数回に渡り実践済みだ。

ましてや通行可能度抜群の富士見の森ならスタートからゴールまでテープ敷設コースでもよい。

筆者の持論だが、オリエンテーリングをメジャーにするには、先ず次世代を背負う多くの子供達にコントロールに到達するうれしさ、自分の力を発揮した達成感、その中で公正な競争、そしてその結果に対して表彰する事だ。

**図２　第２日目の N コース**

O-CUP に名を借りて生意気な私見を述べたが、各大会の主催者や競技責任者、とりわけコースセッターとコントローラーに N コースの設置にもっともっと真剣な配慮を願う者である。

―　会場では主催責任者が、計算センターのトラブルのため表彰取り止めするアナウンスがあり、

盛り上るはずの時間帯に参加者は早々と帰路についた。

成績確定が無いので断言は出来ないが、チェイシングスタートなので所用タイムはともかく、ペナルティーが無い限りクラス毎の到着順がその成績順位のはずである。

ゴール順がいつのまにか、２日目のレースタイムで順位が変動していた事に驚きを覚えた。

今回の計算センターはどんなシステムだったか失敗を繰り返さないため他山の石としたいので是非公表してほしいと願う者である。